

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第246号 (2025.11.2-2025.11.9)

◆

参加者: クイスケ、山羊の頭、しまねこくん、塩の司厨長、
西沢葉火、都まなつ、しろとも、宮坂菱哲、藤岡あや、三明
十種、笛地静恵、あづみのマルコ、片羽雲雀、鈴木正巳、汐
田大輝、池田 突波、アリタ別館、安藤 蜜豆、
Nichttrübsinn、銀星星郎、佐井杜有、水の眠り、山田真佐
明、天然石アクセサリー店、カオルル、雷(らい)、雨声、
砂のような、西脇祥貴、紺野水辺、蔭一郎、青海波、oile、
岡村知昭、石原とつき、空野つみき、こっちゃん、牛田悠貴、
美蟲角(ひちゅうかく)、もりや、季川詩音、猪川久恒、
Sittigara、夜ボエム寄る?、石川聡、ゆうたま、べろぼっ
こ、まどけい、おがけん・Ogaki、ひいらぎ、不思議な話の
アイン、涼、砂原妙々、野菊の薄荷、星野鸞、egg、丹野和
なさわい、よもやまさか、帆井麗、やぶ、ふくろうたかこ
美智子、月波与生(六五名)

◆川柳・俳句

常緑の耳元で骨を強くする クイスケ
灯芯がハオルチアぶる仲保者 クイスケ
胃腸科が膝の上でも大丈夫? クイスケ
ぬげがらのスープの羽音 都まなつ
宇宙人って呼ばれた日 都まなつ
線路沿い波間をつづる 都まなつ
骸骨は月になりたい 都まなつ
一昨年の背中をたたく 都まなつ
ランタンは知恵の輪みたい 都まなつ

全国の山本さんに文化の日　しまねこくん
ギリシャから運ばれる火で芋煮会　しまねこくん
足の毛と紅葉どつちが多いのか　しまねこくん
冬柏動きが止まる所作の星　雨声

シャッフルでできた星座は地下鉄座　蔭一郎

流れゆく悪友にだけ棲む魚　蔭一郎

オリブの実からしたたるみずがめ座　蔭一郎

わからない一角獣に踏みたい　岡村知昭

もう若くないからアルマジロだから　岡村知昭

肺魚から十一月の効果音　汐田大輝

嘘をつくほど水平線に近く　汐田大輝

アカウント凍結冬の陽が赫い　汐田大輝

イノセントワールド氷河期は見捨て　ゆうたま

さんざ初夜。さんざ中島みゆき生え。　西脇祥貴

目隠しで唾液が響く月の客　片羽雲雀

三次元には課税　牛田悠貴

俺のほくらだったのにアニメ化されている　牛田悠貴

絶滅の夜を再現する粘土　空野つみき

目隠しをしても鉢巻　西沢葉火

田周率で餃子する　西沢葉火

わりと好き。パフェの底上げ　西沢葉火

菊酒や舌に花びら遊ばせて　カオルル

芋煮会四方に発泡スチロール　カオルル

マツチ擦るマダムが少しいきむ声　山田真佐明

カフェから姑獲鳥の飛んだ夏を読む　山田真佐明

いいおっぱい優しく包むカーディガン　宮坂変哲

てぶくろは逆さに読んで夜は寝て　しろとも

*

いつまでもいると思うな親と嫁　山羊の頭

雷は着の身着の俣　塩の司厨長

car radio` Beach Boys` 冬初め　二明十種

秋のごとくに散る髪へ 笛地静恵

ドライブインを葡萄酒が逆走していった 笛地静恵

小春日やスカジャン纏ふアメリカ兵 鈴木正巳

ヒーローになりたき猫じやらしの居り 池田 突波

ニ択はいつも背後から アリタ別館

飲み干せよ水星の水 Nichttraucherchen

駆ける人から街は翔ぶ 銀星星郎

トンネルを出でくるみんな同じ顔 佐井杜有

からり からり イチヨウの鳴き声 天然石アクセサリー

lick's

貼り紙の写真を貼るという手法 雷

精神分析された倉本聰 雨声

深秋や故郷の温度たしかめる 紺野水辺

立冬や落葉の溜まる側溝あり onIce

しみじみ飲めば唄うは方舟なおさらハトポッポ 石原とつ

き

猫の腹毛 顔をうずめてふわっふわ こっちゃん

ソプラノのとどく雲間や鷹渡る 美蟲角

アザレアの朽ちゆく花の美しき もりや

Một, hai, ba không phải là bốn 季川詩音

晩秋の 最後を飾る 月光(つきひかり) 猪川久恒

視線はずすパシユラン・デュ・ヴィク・ビル見くびる 石

川聡

イノセントワールド氷河期は見捨て ゆうたま

鮫が鯨食べる鯨が鯨燃やす 岡村知昭

何かを求めることがぼくがいきる 意味なのかもしれない

へるぼっこ

鼻息がすうすう響く無垢の部屋 おがけん

忘れるといふことのみの冬の薔薇 ひいらぎ

棺桶に手足が生えて謝罪する アイン

夕暮れの雲に隠れる月きれい 涼

川柳で書いてみようか辞世の句 まどけい
ウエディング・ヴェールの果ての夕花野 星野響

白が好き石鹸が好き泡が好き shao

浦賀では 黒船襲来 右往左往 丹野 和法

暗闇で羊と歌う子守歌 なさわい

*

蟻塚が見える父の臍母の臍 月波与生

◆ 短歌

キーボード打って空き地を埋めるよう二人の話を note に

記す 水の眠り

きこえるかいビルの隙間の口笛が 去年と同じ曲を演つて
る 藤岡あや

タピオカすらも整列している浮き世にて踏み外す勇氣を持
てません 青海波

*

雨分けて濡れることすらも遊びに変えた 子ども二人は並
んでスキップ 藤岡あや

芸という仮面の奥で息をする恋の本音は花の刃先に あづ
みのマルコ

訳もなく赤の口紅買ってみる闇雲に塗るクレヨンみたいに
砂のような

もうずっと思い出すことのない日がぼくらの生活を作つて
いく shirangana

側にいてなんて言わないただひとつ明日もどこかで生きて
いてよね 夜ボエム寄る？

ひとしずく毒を垂らして金魚鉢あわい背鰭は祈りに似てる
砂原妙々

◆詩・短文

ちいさな夢に身もだえる
ストーブの灯を消したあとに
厚い布団に肩までくるまっている
闇に吹雪が流れている（山田真佐明）

軌道が変わり

地球が月とくつついた
だるまの回転不規則すぎて
太陽系から外れてく

さあ旅立とう

変わらない者達へ

せて新たな夜空だけでも（野菊の薄荷）

◆作品評から

足の毛と紅葉どつちが多いのか しまねこくん
〜どつちじゃろのう。（よもやまさか）

田周率で餃子する 西沢葉火

〜終わりがなさそうですね。無限に作れてしまいそうです。途中からきつと飽きますね。（季川詩音）

秋のごとくに散る髪へ 笛地静恵

〜こ、これは…！切なさを、感じてもいいですか？？笑
（帆井麗）

ドライブインを葡萄酒が逆走していった 笛地静恵

「おはようございませす。昔、国道1号線の保土ヶ谷か原宿東海道あたりにあったシウマイの形したドライブインを思い出しました。(やぶ)」

さんざ初夜。さんざ中島みゆき生え。 西脇祥貴

「初夜は一度きりのはず。『さんざ』がついて、いくらでもあるものに。中島みゆきはひとりのはず。でも『さんざ』がついて、しかも生えて、複数の存在に。たつたひとつの絶対的存在を求める人々を『さんざ』あざ笑う『さんざ』の存在。さて、次はどこにつくか『さんざ』よ(岡村知昭)

俺のほくらだったのにアニメ化されている 牛田悠貴

「自分の知らないところで世の中は動く。いま全世界の視聴者から喝采を浴びるアニメに、俺のほくらが出演していたとは。いつの間に。俺のほくらが俺から離れてゆく。せめてギヤラをくれ。俺のほくらなら、俺をミリオネアにしてくれよ。(岡村知昭)」

私とは何か記憶と違う文字 雷

「禅問答になってきたかのような句。生きていると記憶とほど曖昧なものはないと感じるがそれが文字(言葉)だとしたら? 認知症の方はそういう世界を生きている。(月波与生)」

サポートが切れても柿は吊るすもの しまねこくん

「10月14日、Windows10 のサポートが終了した。10 のままユーザーは不安な日々が続くがそれでも人生は続く。Win7 のユーザーも元気に生きているのだから。(月波与生)」

わりと好き。パフェの底上げ　西沢葉火

　　くパフェは量が多いので、多そうに見えて逆に少ない方が嬉しいという人もいるのかもしれない。でも、詐欺だと思えますし、許されませんね。（季川詩音）

　　私は底のごまかしは許せません。そして割とあるのが、真ん中部分がスカスカのパフェ。悲しいです（ふくろうたかこ）

カフェから姑獲鳥の飛んだ夏を読む　山田真佐明

　　くなんだか情景が目には浮かびますね。ページの向こうに漂う夏の熱気と、読みきれなかった物語の余韻――

少しの挫折も、あの季節の香りと一緒に思い出になるんですよね。あの本、独特の世界観がありますよね。

今なら、また違う気持ちで読めるかもしれません。（美智子）

嘘をつくほど水平線に近く　汐田大輝

　　く冷たい空気の中に、現実と感情の境界がぼんやり揺れているようで――「水平線」や「凍結」の言葉に漂う孤独が、美しくも痛いです。（美智子）